

8. 「難、有り難し」

もう一つ付け加えたいことは、人間の個性、人格を構成している全ての靈魂のうち、良い方に分類される守護靈、守護靈団と呼ばれている靈魂の中には先天的に守護しているものと後天的に加わったものがあります。すなわち、守護靈には先天的に私たちを守護・指導していただいている。また、守護靈団を構成している靈魂たちに加え、背後で後天的に働いている背後靈団には因縁靈、あるいは邪靈を呼ばれる、未発達の靈魂たちがいます。

詳しい説明は他に譲りますが、「後天的」とはどう考えたら良いのでしょうか。それは他人によって後天的に付けられたわけではなく、自らの心の働きから、自らの意欲からそれらの靈魂たちを呼んだということなのです。

ところが、常日頃から申しているのですが、どうも都合の悪いことは他人になすりつけ、自ら不幸になるようにしているにもかかわらず、悪いことや好ましくないことが起こると皆他人のせい、あるいは他のものに責任を転嫁してしまう。「この人がこうである」とか、「この薬が悪い」とかなどとかく不満をいう。挙句に果てに、独身の人は「親が悪いから結婚できない」と言い、また、親の方も「そうか」と思ってしまう。冗談ではないですよ。

人間では、靈的組織の完成度から見ても、5、6歳からもう自力的に判断できるようになっています。昔の元服という時期は12歳前後ですから、今日の成人式の時期の20歳からの他力的教育ではすでに遅すぎるのです。

この頃のお子さんたちは発達が良いですからなおさらのことです。もうその頃から守護靈はどんどん働き、個性的なものは出来上がっているのです、悪いものは悪いことでどんどん働き、善いものは善いことで働いているのですよ。子どもは本来親の、あるいは本人の守護靈の働きで他力的に発達していく。ですから、育児とか、成長などの過程で子教えることができる。これは他力的に行われます。

一方、悪い靈は悪い方向でどんどん働く。善い靈もどんどん働くが、悪い靈が働くときは、善い靈は下積み状態にあることを考えなければなりません。本来であれば、その人の反省力によって、善い靈、悪い靈、こういうものの影響が出てくるのです。そして、どちらかと言うと、双方のうち、悪い方に「バシン」とやられてしまう傾向がある。善

い・悪いが交錯しているのは、迷っている状態と言えるのです。それは「どうしても変だ」、「千々に心が乱れた」ということで理解できるでしょう。

しかし、これを解決しないことには悪い方へ進むのです。悪というのは、この地上の環境では、いわゆる第一線に立つというか、悪の方が助長されやすい傾向にあるのです。

これを神の思し召しと考えたらいけない。この要因の一つとして社会組織の影響があります。社会教育の悪さがある。率直に言うと、唯物教育だからですよ。たとえば「神はどこですかと」いうことになる。

英知であれば必ず精神的なものと物質的なものとを併行させるべきはずのものである。しかし、英知に欠けたところの教育者がいた。言ってみればこれが問題なのですよ。このことは人間にとつての進化過程であるとはいうものの、そこには時代というものの影響が現れている。神がそうさせているのではありません。しかしながら、それは人類の進化というか、人類の幸福へ至る過程と考えてもらえばよいと私は思っているのです。

古代靈シルヴァー・バーチは、「困難とか苦痛とか、どうにもできないところの悩みは、あなたの幸福のための悩みである。不健康はまた健康への過程である。難そのものは永久につづくことはない。難に反省を与える時には、それによって初めて仕合せの目的達成に行く」と説いています。

黒住教の教えの中に、「難、有り難し」というのがありますが、この一句で考えれば、シルヴァー・バーチの通信の1節がよく理解できる。

「難を喜ぶ」。私としてはそれを喜ばずに、「難に感謝しなさい」と言っている。そういうところの組織ということで、地上に向上がる。進化がある。この過程でその人のすべてにわたる向上がある。ですから、「難、有り難し」。それで、私たちは、難を大いに味わう気持ちが欲しいのです。

これに対して、「難があつても平気だぞ」「難に対処するぞ」という人もあるが、これは私に言わせたならば、難を難と思って、負け惜しみというか、そういうことに通じてしまうのです。

「我」であつてはいけません。難に対するある意義を発見して、これで仕合せに進むのだ。これで成功するのだ。この失敗、これが本当の成功への道を教えてくれているのだ。このようにして、この喜びが、この感謝が初めて、その人間を、ある事業を成功させる。そういう組織になつているのですよ。

病気というものは、言い換えれば健康への道なのです。それにもかかわらず、今日の医学は何と言っているか。少なからずの医師は、自分の責任上から、改善の経過をとつても、その後の変化、悪化を心配して、「注意しなさい」という。しかし、その言葉

そのものがどういう影響を与えていたか。患者は自分が理解しているところの社会常識で判断し、ある意味の驚きとなり、心配になり、しまいには、「もしかしたら、あの医師の言ったことは死を意味しているのではなかろうか」と思ってしまう。

その一例として「がん」について考えたらよいでしょう。「がんかもしれない。がんの症状に似ているが、がんはまだできていない。だからがんにならないよう、今のうちに何とか避けておかなければならない」という気持ちを持ちつつがんの専門病院へ行き、そこで「がん」と宣告されたならば、どうなりますか。今までとは態度がすっかり変わり、顔色も変わりますよ。いかに心の変化が影響を及ぼすか。

私はそのときにがんの専門病院へ行くことがいけないのだ、と心靈科学的にいうのです。「人間は本来健康なのだ。がん、恐れるには足らない」。まあ、そういうことを言いつつ、今日の医学がまだ唯物的な表面的な領域から脱していないと言っても、他に方法がないから行かざるを得ないので受診される。そこで引っかかってしまって、かねてから「難有り難し」との思いは観念的になっていたのであろう、実際に宣告されてすっかり気になり、そしてとうとう本当にがんになった方がいる。

仮にがんと言われても、心身の不調和からある毒素が働いてがん細胞に変化させてしまった。「なんだ、これは。この細胞を壊すものを増やせばよいのだから、こういうものを食べていたならば大丈夫だ」という気持ちになって、そのような事態に至っても、意念の統制をし、人間は必ずや健康で過ごせるはずであると信じて、心の奥で感謝していれば、そんなものは治ってしまい、一週間も経てば、先の医師が誤診かと疑うほどに治った状態に戻っているかも知れない。

このような例は、私はがんにおいても、幾人もの治癒例を持っておりながら、申し上げているわけですが、一番多い例は結核ですよ。私は結核の場合、1か月も経てば、レントゲンの状態でも明らかに改善する。そのように変わることを自信持って申し上げているのです。それが心身相関というものなのです。

とにかく、いかなる場合であろうとも、私たちは有り難くできている。私たちは病気、たとえば風邪を引いたような場合では、本来ならば一晩で治ってしまうはずですよ。また、痛みが1週間、2週間つづいた方がある。このようになるのは、私の話を耳から聞いても、右から左に抜けているような方なのです。どんなことがあろうとも、即刻そんなものはどつかに行ってしまうのですよ。本来、痛みとは有り難いモノですよ。

私たちは感謝というものをすべてのことに対して持たなければいけせん。感謝という気持ちを持っておれば、その感謝をさらにもっと心から感謝するようにしなければいけません。ところがいま例にあげた人の場合はそうではないですよ。感謝どころではな

い。嫌なのです。不平不満なんです。それと我が強いのです。自分の考えだけを押し通そうとしている。このような人たちは大いに反省しなければいけない。大いに感謝しなければいけないのです。ところが感謝なんて持ち合わせていない。

ですから、病気になって、2日以上寝た方は大いに反省しなければいけませんよ。病気を2日以上、あるいは何か苦しみが同様につづいた方は自分がいかに頑固であるか、いかに自分自身が理解力に乏しいか、いかに自分たちは物質的であるかということを考えてもらえばいいと思います。

それと同時に、その方が統一実修をやっている場合は、どのようなことをやっても疲れることはないのです。もしも仕事をして疲れる。その原因は仕事が無理だということよりは、仕事に対して感謝が足りないというところでしょう。何か唯物的な、何か他の方に主眼を持っていっているわけです。あるいは、世間的な名譽や地位に結びついているのかもしれない。あるいは能力がないのに我慢しているかもしれない。あるいは、こいつをやり遂げなければ認められないとやっているのかもしれない。どのような仕事に対しても感謝の心を持ち、これが自分の務めだ、そして奉仕するのだという気持ちを持つづけている場合には、絶対に疲れることはないのです。

ただし、疲れるということは、心の問題と身体の問題とがもちろんあるのです。疲れるということも病気も同じこと。心身の違和なのです。すなわち、心、身体が一致していない。一致していないということは、心は結構だとしても、どのようなものを摂るか、食物については考えてもらわなければならない。やはり、私たちが主張しているところの食生活にしたがってもらわなければどうしようもない。たとえば、肉食はやめてもらいたい。どこまでも野菜とか海藻類、これで私たちは絶対に衰えもしなければ、また病気をすることもない。子どももどんな場合があろうともすくすく育っていくのです。

これまでの指導で好ましい実例があちこちで沢山報告されてきました。大崎支部の話ですけれど、に肉食をすっかりやめてから10年以上なる方で、生まれた子どもをそういうものに触れないようにさせている。保健所の方では、肉食、動物蛋白によって育てたのだろうと勝手に思っているのですね。発育は想像以上だというのです。しかし、このこともただ肉食を止めたことだけではない。やはり精神、心をおろそかにしてはならない。意念の統制にあるということはもちろんです。

何故ならば、親の心が子どもに移るわけですから、親の確信は子どもの確信になる。それは赤ん坊であっても確信が及ぶのです。靈が働いています。だから、夫婦間で喧嘩したならば、しくじってしまう。夫婦、祖父母、いろいろな関係、これが子どもたちに影響する。やはり心の問題になってくるわけです。

とにかく、どのような場合であっても、私たちが使命に基づいて行動しているかぎり、それを応援している守護霊、守護霊団が働き、絶対に疲れることはさせません。われわれの主張する食生活をはじめ、個々の衛生を配慮しておられる人においては、少し余分に仕事をしたからといって疲れるのは、その方に何か問題がある。それは何かというと、我の強い人、感謝の足りない人、相手の心を心としない人、明らかに個人主義なのです。ですから、病気がちな人、いつも不健康な人、こんな人は個人主義者です。

ほんとうの奉仕の精神、この奉仕というのは、商売上でよく使われる奉仕ではありませんよ。心から人類のために、心から自分の主義のために、心から一家のためにという犠牲的精神に立った奉仕の精神、同時に自分の存在を忘れて、いわゆる無我の状態、あるいは自分を構わない人においては病気も疲れもない。また自分の思い通りに行くのです。もし、これと反対の状況にある場合は、反省してもらわなければなりません。

ですから、精神統一を実修されておられる場合に、疲れるの、どうのこうの、こんなことがあるということは、その統一は絶対に不完全なのです。統一にあらざる統一です。日常生活で何をやっているか。これが必ず霊と関係しているのです。

私はみなさんにあまり申しておりませんけれども、私は統一会で背後の整理を行なっているときには、その方の使命達成、同時に背後の霊の整理、その家に一番大きな影響を及ぼしている霊まで向上させるようにしているわけですから、因縁霊などは、統一の第一回目の時にすでに向上させているのです。